

「バナナ名刺」で環境と貧困救え

「バナナ名刺」で環境と貧困を救える。札幌市の印刷会社「丸吉日新堂印刷」が、アフリカ南部ザンビア産バナナの茎を原料にした名刺を作製し販売を始めた。従来、捨てられていた部分の商品化は、雇用創出と森林保護に結びつく取り組みだ。

「『これ、バナナなんですよ』と名刺交換するだけで、相手は環境問題に関心を持ってくれる」。丸吉日新堂印刷の阿部晋也社長(40)は笑顔で話す。

名刺は、茎の細かい繊維が浮かび、和紙のような風合いが特徴。茎と古紙を3対7の割合で混ぜて作る。茎はバナナの収穫後に廃棄されるごみで、新たに木を切らないため環境にも優しい。茎を乾燥させる工程

などは、貧困者が多い現地に任せられ、雇用が生まれている。日本で4000人規模の会社がバナナ名刺に切り替えると、1年間で約200人のザンビア人が生活できるという。収入を得るための違法な森林伐採の防止にも役立ちそうだ。

丸吉日新堂印刷は約10年前からペットボトルの再生材などを使った「エコ名刺」を販売。愛用するスウェーデン人の発案でバナナの茎の利用が実現した。ほかにも札幌・大通公園で売られるトウモロコシの皮、牛乳パック、間伐材など15種類の名刺を扱う。バナナ名刺は100枚で1680円からと2割ほど高いが、環境意識の高い企業や個人から注文が相次ぐ。顧客の8割は道外で、

名刺の原料に使われる乾燥させたバナナの茎(右)と、さまざまな素材で作られている「エコ名刺」



名刺交換や口コミを通じて人気が高まっている。

阿部社長は「環境問題の解決に必要なのは、互いを思いやるコミュニケーション。名刺を通じた人との出会いが、環境を守るきっかけになってほしい」と話した。

が多く、通常の除染で線量を下げ難しさを裏付けた。

色素反発、体にしま模様 生物の体のしま模様は、違う色の色素細胞が互いに反発して遠ざかることでできることを大阪大の近藤滋教授のチームが熱帯魚で明らかにし、10日付の米科学誌サイエンスに掲載された。

動物が進化の過程で、多様な模様を獲得した理由の解明につながる成果。近藤教授は「シマウマなど別のしま模様の動物でも同じ仕組みが働いているだろう。この仕組みを応用すれば、キリンなど他の模様のでき方も説明できる」としている。